**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダとの出会い**

**シリル・ヴェリヤト**

**上智大学　総合グローバル学部教授**

 **駐日インド大使ディーパ・ゴパラン・ワドゥワ閣下、駐日ネパール連邦民主共和国大使マダン・クマール・バッタライ閣下、 シスター塩谷、スワーミー・スヒータナンダ氏、そしてご友人の皆様。私は今日の式典でのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダへ奉げる短時間でのスピーチを依頼されたのですが、私自身の、この特別なインドの聖者との出会いについてお話することに致しました。**

 **皆様すでにご存知のように、私はインドで、ヒンズー教の母とキリスト教の父の間に生まれ、私はインドでローマン・カトリック信者として育てられました。私はカトリックのイエスズ修道会に１９６８年に入会し、１９８２年に神父となりました。そして１９７４年に来日してからは、上智大学で３０年近く教鞭を取っています。私は日本ヴェーダンタ教会と１８年程のつながりがあるのですが、今日の式典にご招待くださったスワーミー・メダーサーナンダ氏の寛大なお心に感謝申し上げます。**

 **私が最初にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの事を読んだのは、インドで大学生時代を送っている頃で、バラティヤ・ヴィーヤ・バーヴァン著作のヒンズー教についての本からでした。その時私は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの許容力と寛容力のある性質に感動したのを覚えています。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは敬虔なヒンズー教徒でした。彼は忠実にヒンズー教の教えに従っていましたが、同時に他の宗教にも敬意を払っていたことは、とても特徴的なことです。キリスト教では「キリストに倣いて」という霊性についての本があります。この本は１５世紀に書かれ、私は学生時代に深い興味を持ってこの本を読んだものです。私がスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯についての本を読んだときに驚いたのは、彼はこの本を読んだだけではなく、その中の幾つかの段落をベンガル語に訳したことです。このことに私は強く感銘を受け、私はこの特筆すべき方の教えについてもっと学ぶ義務があると感じました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの書かれたものの中で、幾つか深く印象に残っているものをご紹介いたします。１９８４年１１月１９日に、ニューヨークから彼のインドの友人であるアラシンガ・ペルマルに宛てて書かれたものです。「私は地球上においてパンを与えてくださらない神は信じるけれど、天国で永遠の至福を与えてくれる神は信じない。現実世界での神を信じられずに、どうして天国の神を信じることができようか」。別の言葉に言い換えると、彼が言いたいのは、宗教は教義的、抽象的なレベルに留まっていてはいけないということです。宗教は愛や他社への奉仕に変換されていかなければならないのです。**

 **キリストの弟子の一人であるヤコブの手紙には、「例え信仰があろうとも、慈善活動をしなければ、我々の信仰は死んでいるも同様である」とあります。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯は、彼が慈善活動に強い信念を持っていたこことは確かで、それはラーマクリシュナミッションの世界中の会員による、教育の設立や奉仕活動などから明らかです。それと同時に、彼は私たちに、慈善だけに活動を制限することのないように、と警告もしています。信仰、労働、責任は等しく重要なものだからです。ある時彼がバクティ・ヨガについて書いたものですが、「多くの人にとって、宗教は単に一日の労働を終えてから小さい慈善活動を行うもの、という手段になってしまっている。私たちの宗教はこのようにならないよう、気をつけなければならない」と言っています。**

 **今世界中で苦しんでいる多くの方々について、ローマのフランシスコ教皇は以下のような声明を発表いたしました。「人権はテロリズム、抑圧、暗殺だけではなく、偏った経済構造が大きな不平等の原因となっている」。この教皇のお言葉は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが１００年以上も前の１８９３年にシカゴで行った世界宗教会議のスピーチを思い起こさせます。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはこのように発言しました。「宗教の派閥、偏狭な考え方、その末裔、狂信主義、は長い間この美しい地球を占領してきました。このような考え方は地球を暴力、流血、文明の崩壊、そして国民を絶望させてきました。このような悪が蔓延っていなければ、人間の社会は現在よりはるかに発展していたであろう」。**

 **今日の世界に必要なのは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのようなお方です。私たちの周りにある無秩序、人々の中に見られる憂鬱、富める者と貧しい者の格差拡大、孤児と未亡人の哀願は、私たちが神からの奇跡を緊急に必要としているということの表れです。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのお慈悲と、私たちが奇跡に与れますように、一緒にお祈りいたしましょう。**